

1. 動物介在教育・療法における共通理念と犬の評価方法

内田佳子

酪農学園大学獣医学部

日本社会における動物介在教育（AAE）や動物介在療法（AAT）の正しい普及のためには、人材育成が急務である。すなわち、人間と動物の安全と福祉を基盤とした正しい知識に基づいたAAEやAATを実施、推進することのできる人材を育成することである。

初めに、AAEやAATは、動物介在活動と同一ではないことを明確にしたい。あくまでも対象者（幼児、生徒、患者など）に関する知識を十分に持ち、その教育や治療に責任を有する者の管理下で行われる教育または治療行為としてとらえなくてはならない。ところで、これらを推進する人材にはもちろん介在動物への専門知識を併せ持つことがのぞまれる。すなわち、対象者に関する教育に加えて動物に関する教育を受けた人材である。しかし現状を考えるとそのような人材はほとんど存在しないし、教育機関もない。であれば、現状ではAAEやAATの推進には、対象者に焦点を当てた人材（有資格の医療関係者、教員など）と介在動物に焦点を当てた人材（獣医師、動物看護師、ドッグトレーナーなど）の両者が協力しあうことが実際的だと考える。

現時点の大きな問題点として、対象者に焦点を当てることができる有資格者はAAEやAATへの関心が低いことに起因するののか、動物側の人材がその分を超えて対象者に直接的に関わり、時には効果判定を行っていることがあげられよう。これらの行為が逆に対象者側にたつ有資格者の反感を招き、AAEやAATの普及の妨げになっていることも伝え聞く。つまりAAEやAATの推進を阻止する悪循環が生じていることになる。動物側の人材は自らを律し、自らに求められる専門性は適性ある動物を評価・選択する、介在時の個々の動物に適した活用方法のプランを作成し対象者側の有資格者に提案または提供する、また活用時の動物福祉を判定するなどの行為であることを再度認識すべきであろう。そしてこれらの行為はAAE、AATの遂行に不可欠なのである。

The International Association of Human-Animal Interaction Organizations が世界に向けて発信してきた先駆的な声明の中で、プラハ宣言では介在動物についての選

択基準や活用時の留意点が示されている。正の強化による訓練をした家畜動物だけを使用すること、過去から将来にわたってその動物が正しく飼養されること、動物に対する悪影響を防ぐ手段が講じられていることがそれである。

以下、犬の適性評価と評価を行う人材育成のための提言をしたい。適性ある犬のみをAAE、AATに活用することは、まさに動物福祉にのっとった行為であると同時に対象者への安全の保証になることを記録すべきであろう。

I. 犬の適性評価のための提言

以下は犬の適性を判断する最低限の検査項目として課すべきであろう。

- 1) 対象者、関係者、他の犬、及び周囲環境に病原体を媒介しないこと
 - ①ウイルス：狂犬病、ジステンパー、パルボ、アデノ、パラインフルエンザ
 - ②細菌：パスツレラ、サルモネラ、カンピロバクター、エルシニア、レプトスピラ、病原性ブドウ球菌、ブルセラ
 - ③その他：コクシエラ
 - ④真菌：皮膚糸状菌、マラセチア、クリプトコッカス
 - ⑤外部寄生虫：ノミ、シラミ、疥癬
 - ⑥内部寄生虫：回虫、条虫（含エキノコックス）
- 2) 対象者、関係者、他の犬、及び周囲環境に不快感を与えないこと
 - ①手入れ（毛、爪、歯石等）されている
 - ②みだりに排泄をしない
 - ③吠えない、鼻を鳴らさない
 - ④ハンドラーに対する服従度
 - ⑤対象者への不適切な自発行動（不安行動、興奮性など）
- 3) 活用が犬自身にとって精神的及び身体的な負担にならないこと
 - ①心身の健康
 - ②動物福祉が守られた飼養環境、活用現場
 - ③活用時および活用後の不安行動、極度の疲労や

異常行動

4) 犬とハンドラーとの関係（含：ハンドラーの適性）

- ① 犬は恐怖心からではなく、喜んで服従している
- ② 動物福祉に立脚したハンドリングができる
- ③ 必要な時に適切なコマンドを出すことができる

具体的にこれらを評価するための試験は、AAE, AAT, AAA に関し世界をリードするデルタ協会の Pet Partners[®] Program が課しているハンドラーの試験前の学習, Pet Partners[®] Skills Test : PPST, Pet Partners[®] Aptitude Test : PPAT が参考になるだろう (<http://www.deltasociety.org/>)。もちろん、それぞれの状況に合わせて変更を加えた試験を実施するよう推奨したい。以下に PPST と PPAT の概要を記載しておく。

＜Pet Partners[®] Skills Test : 動物とハンドラーのペアが不快感を与えることなく安全に行動できるかどうかを評価する試験＞

- 1. 質問票の確認
- 2. 友好的な見知らぬ人を受け入れる
- 3. なでられることを受け入れる
- 4. 外見とグルーミング
- 5. 散歩
- 6. 人ごみの中を歩く
- 7. 視覚・聴覚刺激に対する反応
- 8. 指示に従って座る
- 9. 指示に従って伏せる
- 10. 待て
- 11. おいで
- 12. 他の犬に対する反応

＜Pet Partners[®] Aptitude Test : そのペアは活動に対する適性があるかどうかを評価する試験。ロールプレイが要求される。＞

- A) 全身の検査
- B) 過剰なあるいはぎこちない撫で方
- C) きつく抱きしめられる

D) よろよとした動き、さまざまなジェスチャーをする人

E) どなり声

F) 背後からぶつかられる

G) 数人に囲まれ、なでられる

H) 放っておきなさい (Leave it)

I) おやつを差し出される

J) 総合評価

II. 動物の適性評価を行う人材育成のための提言

デルタ協会はまた同時に評価者の育成も行っているがこの育成プログラムを日本において現段階で利用しても基礎的な知識において若干不足があるように感じる。獣医師、動物看護師、動物行動学者など以外の初心者が評価者となるのに求められる教育カリキュラムには以下のものが含まれるべきだろう。

- 1) 動物行動学
- 2) 動物福祉学
- 3) 動物飼養・管理学
- 4) 公衆衛生学（人獣共通感染症学）
- 5) ヒトと動物の関係学
- 6) 動物介在教育論
- 7) 動物介在療法論

これに加えて以下のような対象者に関する知識を得ることができれば、より犬に求められる望ましい適性の判断に役立つだろう。

- 1) 発達心理学
- 2) 教育心理学
- 3) 児童福祉学
- 4) 高齢者心理学
- 5) 看護学
- 6) リハビリテーション論

これらのカリキュラムは、人間側の専門家の協力が不可欠である。すなわち冒頭に書いたように AAE, AAT は人間側に立った有資格者の積極的な関与なしには成立しないもので、動物の適性判断にもその関与を求めることが望ましい。